

フルートとオーボエ



清岡卓行 講談社

フルートとオーボエ



清岡卓行

フルートとオーボエ

昭和四十六年二月二十八日 第二刷発行

著 者 清岡卓行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二 郵便番号 一一二

電話東京(九四三)一一一一(大代表)／振替三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

定 価 五五〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© Takayuki Kiyooka, 1971 Printed in Japan

目次

フルートとオーボエ

5

萌黄の時間

77

小説についての断片

195

—あとがきにかえて—

作品発表おぼえがき

212

装画 鹰山宇一
装帧 横山明

フルートとオーボエ

清岡卓行

フルートとオーボエ

1

「パパには、プロ野球が一番よく似合っているのに」

彼の妻は、夕食を用意している手を休め、彼の方に向き直って、いくらか残念そうに、そう言った。

「だけど、これで本職に戻ることになるんだから」

「それが、そんなに嬉しいの？」

彼女の濡れている手もとから、ごく微かに、どこかの海の匂いが漂ってくるようであった。左利きの彼女は、庖丁と鉄槌を器用に使って、組板の上で、

殻のついた牡蠣の口を、ひとつひとつ開けていたところであった。

「そりゃ、古巣に帰るような懐かしきがあるからね、ほとんど、もう十五年ぶりで。……それに子供たちにしても、大きくなって、お父さんは何をしてますかってひとから聞かれたとき、大学の先生をしますと答える方が、ずっと楽なんじゃないかしら？」

彼が子供たちのことを持ちだしたせい、彼女はそこで黙った。

今しがた、彼が勤め先から帰ってきて、手を洗っていたとき、ほとんど同時に電話のベルが鳴った。彼の昔の高校の先輩からであった。そのひとは、東京のある私立大学のフランス語の教授であった。その電話の声には、教壇で長いあいだ鍛えあげたような、精力的なひびきがあった。

「今、教授会が終ったところなんですがね。あなたの専任講師の件、通過しましたから。あと、理事会を通らなくちゃならないんだけれど、それは形式的なものですから、もう決定したのと同じことです」

彼はその先輩と、それからもう一人、たまたま同じ大学で言語学などの教授

をしている知人から、フランス語の先生をやってみないかと以前から誘われ、ついその気になって、先方に話をまかせていたのであった。

二月なかばの平凡な夕ぐれどきである。それは、昨日の夕ぐれとも、一昨日の夕ぐれとも、まるで変らない。たぶん、明日の夕ぐれも、明後日の夕ぐれも、同じようなものだろう。

保育園に通っている次男は、炬燵にはいつてテレビの漫画をおとなしく眺め、友達とピンポンをしに近くの卓球場へ行っている中学生の長男は、まだ帰ってきていない。玄関の郵便受けに、配達の遅い夕刊が投げ込まれる音がする。彼は、居間の石油ストーヴに近寄らないで、すぐ洋服を脱ぐ。太っているせいか、冬の寒さがそれほどきらいではない。

近い将来への見通しだけが、いくらか変わったのであった。あと一箇月半ほどして、四月の新学期が始るとき、もう四十歳にもなっているのに、彼は転職しなければならぬ。それも、スポーツの興行の企画の仕事から、大学で教鞭をとる仕事へという、たいへんな変りようだ。その境い目に、心の持ち方をさっ

ばりと切換えることは、かなり辛い経験になることだろう。

新しい勤めに備えて、彼はここ一年近く、ラジオやテレビでやっているフランス語講座というものを聞いてきた。また、フランス語入門と銘うったソノ・シートなどを買ってきては、飽きもせず、繰返し聞いた。彼の妻は、そうした彼の努力を、なかば呆れ、なかば面白がって眺めていた。

彼が戦争中の高校ではじめて習ったフランス語は、フランス人の先生がいたことはいだが、その授業は一週間に一時限の飾りのようなもので、それ以外の十時限あまりは、二人の日本人の先生が文法と読解を熱心に教えてくれるものであり、発音にはなぜか力を入れてくれないものであった。そうした癖をつけられた彼は、大学の仏文科へ行ってからも、戦中はその性質のために、戦後はその生活のために、講義にはほとんど出ず、自分ひとりで気に入った原書を黙読したりする学生であつたので、発音にはまるで自信がなかった。

そういうわけで、彼は、大学を出て十数年も経っていながら、今さらのように、ラジオやテレビやソノ・シートなどで、せめて発音の基礎でも復習してお

こう思ったのであった。

もっとも、いくらか自信があった読み書きの方も、ひさしぶりに昔親しんだ原書などを取り出して眺めてみると、かつて憶えていた言葉の半分くらいは忘れていたようで、まことに不安であった。語学における長い空白の期間は恐ろしいものだ、彼はそのとき、今さらのように、ある友人の話をなると思いついた。新聞社の特派員として、かなり長い間エジプトなどに行っていたその友人の話によると、日本語でさえ、使わないでいると少し忘れるというのである。それにくらべて、泳ぐとか、自転車に乗るとかいった、いわば体で憶えたことがらは、長い空白の期間があっても、まず忘れてはいないということであった。

そうした言語の頼りない性質のおかげで、彼は一年近くも、朝、プロ野球のリーグ事務局へ勤めに出かけるとき、電車の中の三十分ほどは、宿酔のときを除けば、たいてい、手頃な単語集や熟語集を眺めることに費したものである。

そんなふうに、中年の男の顔をぶらさげながら、ほとんどいじらしくフラン
ス語の復習をしていたところを見ると、彼が職業を変えようとしていた意志
は、充分に固いものであったのだろう。今しがた専任講師にほぼ決ったことを
伝えてきた先輩の、電話の中の太く精力的な声も、彼の五体に、一種の快さと
言つていい新しい緊張を、久しぶりにもたらししたのであった。

生業が変わるときの、少しばかりの恐怖と、かなりの闘志がいりまじっている
微妙な緊張。

それは彼にとって、ふしぎに懐かしいものであった。それは、いわゆるアル
バイトをいくつも転々としたり、仕事がなかなか見つからなくて惨めな思いを
したり、せっかくなりついた定職らしいものをときに変えたりした、戦後の荒
廃の時期、彼の二十四歳頃からの数年間を、ゆくりなくもちらりと、しかし生
生しく思いださせてくれるものであった。

たとえば、はじめての仕事に出かけて行く朝、なぜか夜明け前にひとりでに
早く眼が覚める。そんな彼の耳に、やがて、やっと眼覚めはじめた都会のさま

さまざまな騒めきが、遠くから波のように押し寄せてくる。それは彼にとって、生きることが悲しくなるような、戦いの開始の合図だ。夜の眠りの中、あるいは家庭の甘さの中でとろけていた彼の心は、その表面から凍りはじめる。——そのような、心のあらかじめの半氷結にかたどられる、かつての転職の哀れな緊張。

しかし、彼はそのとき、もう決まってしまった自分の新しい処世の姿勢よりも、妻の言葉に籠っているふしぎな優しさのようなものの方を、もしかしたら正当ではないかと感じていた。

そして、料理に戻った彼女の、三十代なかばになってもまだ可憐な感じがする襟足のほつれを眺めながら、彼は、昨日の夜なぜかしら思いたって整理していた、まことに馴染深い大学ノート十数冊の、いかにもくたびれていた形を、頭の中に思い描いた。

それらのノート。手垢や埃でかなり汚れ、青や赤のインクのしみがついたり、表紙のふちが欠けていたり、背中がいくらか剥げて糊のひからびたところが見えていたりする、貴重この上なかつたさまざまなノート。それらは不意に、非常なスピードで、彼から遠ざかって行くようであった。

なんという、よそよそしい分離のはじまり。それは、骰子の転がり方ひとつで決められるような、無残な別れにいくらか似ていた。その寂しさは、まるで張りつめた心の皮膚の痛覚のようであった。

それらは、その直前まで、ほとんど彼の肉体の一部のようなものであったのだ。彼の両手の指先にあつて、いわば生きるための触角のようなはたらきをしていた一群のノート。

それらの、ずしりと重たい十数冊のノートには、彼の二十七歳から四十歳までの、つまり三十代がすっぽりとはいる、いわゆる働きざかりのエネルギーの莫大な部分が、彼にだけわかるような形で閉じ込められていた。それらのノートは、十数年間、プロ野球のあるリーグにおいて、ペナント・レースのすべて